



共創の旅

サリス 日誌
介助士

ダイバーシティとLGBTを考える

ダイバーシティ(Diversity)とは、直訳すれば「多様性」。もともと、アメリカにおいてマイノリティや女性の積極的な採用、差別のない処遇を実現するために広がったものです。その概念が広がりを見せ、「多様な働き方」を受容する考え方として使われるようになりました。

日本はどうかと考えると、日本はLGBTに対する認知度がまだまだ低い状況です。どこかの調査では、自分が性的マイノリティであると認識している人は7・6%(約13人に1人)にのぼるとあります。この数字は、社会には左利きの人が10%いると言われることをイメージすれば、少ない数字では

喜山 光子

公益財団法人 日本ケアフィット 共有機構

ありません。来年に迫ったオリパラ開催に向け、日本は、ホスト国としてどう対応すべきなのか? 宿泊施設でのチェックイン、トイレや入浴時に配慮すべきことなどを当たり前のこととして準備できているのだろうか? 観光産業として向き合う課題はかなり多いはずです。

すでに厚生労働省も「旅館業における衛生等管理要領」を改正し、同性カップルの宿泊を拒否することは旅館業法違反にあたるとしましたが、実際には宿泊を断られることが多く、改善指

導が進まないのが現状です。障害だけがマイノリティでないことを私たち自身がもつと学ぶ必要があります。ではないでしょうか…。

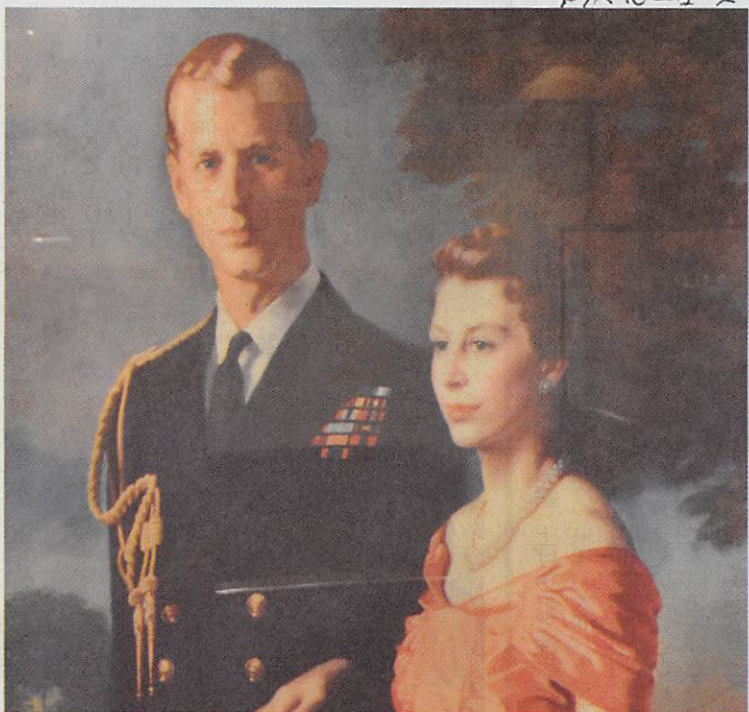
池田 良徳 (大阪経済法科大学 新クルーズ学)

18
2019/6/10
トラベルニュース

クイーンメリー2に乗る

2月に名門キュナードのフラッグシップ「クイーンメリー2」に初乗船して、クルーズは容易な事ではありません。

キュナード社は英国の老舗客船会社で、かつては大西洋横断定期航路に「クイーンメリー」や「クイーンエリザベス」などの大型豪華客船を配船していました。しかし1960年代末には定期客船の時代は終わり、長距離の旅客輸送は航空機に役割を譲り、最後の大型定期客船として建造された「クイーンエリザベス2」(以下QE2)は



クイーンメリー2の名付け親は現エリザベス2世女王で、その肖像画が船内に飾られていました

1に出し、横浜港や大阪港に長期間停泊させてホテルとレストランとして営業をしたりして、糊口を凌いでいました。

変更されて完成しまし

老舗ブランドの重厚さに圧倒

そして大規模投資を行って新造したのが、キュ

ました。

詳しくは次回にご紹介

乗船した第一印象は、英国調の落ち着いた内装で、重厚さを感じさせるということでした。カリブ生まれのアメリカ型クルーズ船に乗る機会が多い筆者は、その重厚さに圧倒されました。

キュナードのエンブレムが随所に配置され、「伝統あるキュナード」をアピールしています。

創業者のサムエル・キュナードの肖像画や、英国女王の肖像はありましたが、カーニバルの創業者の肖像画は見かけませんでした。カーニバル色を決して出さないように徹底しているようです。落ち着いた船内、質の高い食事とサービス、どれをとっても満足のいく船旅でした。